

<全体分析>

試験時間 120 分

解答形式

I・IIは論述式、IIIは記述・論述式

分量・難易 (前年比較)

分量 (減少・やや減少・**変化なし**・やや増加・増加)

難易 (易化・やや易化・**変化なし**・やや難化・難化)

出題の特徴や昨年との変更点

400字3題の出題は不動である。2025年度は、単語問題以外に分割された問題はなく、昨年度に続き400字3題の出題となった。Iは欧州の中世・近世、IIは欧米の近世・近代・現代史、IIIは近代・現代のアジア史の枠組みが定番となっている。資料の読解を含む問題が多いが、2025年度はIIIで資料が出題された。

新課程を踏まえた出題

IIIは、歴史総合・日本史探究のIIIと共通の問題であり、歴史総合の分野からの出題が見られた。

その他トピックス

IIIは歴史総合からの出題となり、韓国併合と委任統治を比較する問題となった。日本史との共通問題となったが、これまでのIIIの傾向から考えて世界史の立場から見ると大きな違和感はなかった。なお、Iは2024年度夏期講習「一橋大世界史」、IIIは2024年度冬期講習「一橋大世界史」の問題がズバリ的中した。

<大問分析>

番号	出題形式	出題分野・テーマ	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	論述	ウェストファリア条約の内容と国際関係に及ぼした意義	ウェストファリア条約の内容3点はどれを選んでよいが、ヨーロッパの国際関係に及ぼした意義については、皇帝・教皇の神聖性の否定、主権国家体制の確立、ハプスブルク家に対するブルボン家の優位をあげ、条約の内容はこれに結びつけるように説明する。	標準
II	論述	「市民結社」が発展した背景と政治文化史的な意義・限界	問題文にある「中間団体」に関しては王権を支えたギルド(指定語句)と結びつけて説明する。対して「市民結社」は身分制を否定する啓蒙思想と結びつけ、彼らがたしなむ植民地物産(指定語句)は奴隷などによって生産されていることを「限界」として指摘する。	難
III	記述 論述	「韓国併合」と第一次世界大戦後の委任統治	日本史との共通問題として、世界史受験者が想定しうる解答例を示した。「併合」は実質的な植民地統治であったこと、「委任統治」は、将来の独立を前提としながら、事実上戦勝国による植民地の再分割であることを指摘したい。	標準

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

史料・資料問題は頻出である。やはり日頃から史料・資料問題に慣れておく必要はあるだろう。今年度はIIで難問が出題された。受験生を困惑させるものではあったが、代表的教科書には「市民結社」の記述がある。事件・事項を追いかけることに終始したり、細かい知識に偏る学習では対応できない。教科書を十分に活用し、基礎となる歴史理解の徹底につとめたい。文化史・社会史を含め基本となる通史はなるべく早く仕上げよう。そのうえで過去問研究を周到に行い、繰り返されるテーマに共通する事項・知識を確実なものとし、覚えるだけでなく、思考の材料として使えるようにしておきたい。